

The University of Aizu  
Center for Cultural Research and Studies  
Annual Review No.30, 2023

会津大学文化研究センター  
研 究 年 報

第 30 号  
2023



会津大学

2024年3月 発行

# 目次

	Page
<b>巻頭言</b>	
・ 着実な一歩を —2023 年度活動報告—	1
	荻間澤 勇人
<b>論文</b>	
・ スポーツ虐待とアスリートの依存四類型の関係性の検討 ——指導者の適性と企業の人事戦略に向けて——	5
	小川千里 , 煙山千尋
<b>研究・教育・活動報告</b>	
・ 網谷 祐一	15
・ 池本 淳一	16
・ 蛭名 正司	17
・ 小川 千里	18
・ 沖 和砂	19
・ 荻間澤 勇人	20
・ 小暮 克夫	21
・ 中澤 謙	22

## 【巻頭言】

# 着実な一步を —2023 年度活動報告—

文化研究センター長 荻間澤勇人

2023 年 5 月 8 日以降、新型コロナウイルス感染症が 5 類感染症となり、国レベルでの対応から個人レベルでの対応に変わりました。大学でもオンラインやソーシャルディスタンスを確保した教室活用が解除されて、コロナ対応を個人の責任で行いながら、対面での学習活動を行いました。新型コロナに感染した学生もいましたが、大学内で大きな混乱が生じることなく良かったです。

さて、7 月に本学にとって大きな出来事がありました。理事長への辞任勧告があり、宮崎理事長が勧告を受け入れて辞任されました。学生や一般教員にとっては突然のことであり一部に動揺がみられました。また、新聞やニュースでも取り上げられて県民から注目されました。辞任勧告に至った明確な経緯は明らかになっていませんが、過去に執筆した学術論文において、その以前の自身の論文から適切な引用をせずに図表を用いた「自己盗用」と、大学院改革に関わる文部科学省への申請プロセスにおいて「コンプライアンス違反」があったとのこと。私は宮崎先生と 8 年間ご一緒しました。会津大学の発展を目指す姿勢が感じられる強いリーダーシップで理事長職を務められたという印象があります。ですから、辞任をととても残念に思っています。宮崎先生が学生課で最後に挨拶された際に、文化研究センターの先生方が駆けつけてくださいました。また、中澤先生が花束を用意して、沖先生が贈呈されました。宮崎先生が感謝してくれる人がいたとだけいただければ、我々は嬉しいです。2023 年度、本学は開学 30 周年を迎え、様々な記念事業を予定していましたが、理事長辞任によって事業が見送りになったり、規模が縮小したりしました。その点はとても残念だったと思います。

つぎに文化研究センターに目を向けます。4 月から教授の審査委員会を立ち上げて、科学哲学領域の教授職を学内公募しました。網谷祐一先生が応募されて審査が行われた結果、2024 年 4 月から教授とされます。その一方で、清野先生の後任の教官公募を行っていないため、本センター教官が一名不足でした。2023 年度は法学を不開講とし、日本国憲法を大阪公立大学の白鳥能伸先生に集中講義でお願いしました。不足分の教官採用について、未だどの領域で公募を出すかが決まっていません。この課題は 2024 年度へ繰り越したいと思います。

2014 年からの 8 年間で 8 名の教官が本センターを去られて、構成メンバーが大きく変わりました。2023 年度は大きな変化が一段落して、比較的落ち着いた 1 年だったと思います。2024 年は会津大学と本センターの 5 年先あるいは 10 年先を見通して計画を立てるべきだと考えます。4 月から文化研究センター長を中澤教授が務められます。皆で一緒に着実に一步を踏み出しましょう！



# 研 究 論 文



# スポーツ虐待とアスリートの依存四類型の関係性の検討

——指導者の適性と企業の人事戦略に向けて——

小川千里<sup>1</sup>、煙山千尋<sup>2</sup>

## 1. はじめに

スポーツ才能教育のアスリート、とりわけ高戦績の者については、その多くが引退後に指導者となる（小川、2013、2015）。そしてそこではアスリートに対する指導者からの暴力や暴言といった虐待的行為が繰り返し行われている（Human Rights Watch、2020）が、これらは指導者とアスリート「心理的発達の未熟さ」と、両者の間にある「家族・家族的関係に基づく共依存関係」（小川、2013、煙山・小川、2021）に起因する。ここで重要なのは、才能教育における指導者も「疑似親(Surrogate)」（Marcia, 1964）として家族的な共依存関係にあり、アスリートの心理的発達を遅らせるメカニズムの中で示されていることである。さらに、臨床心理学とその実践では、家族間の共依存関係（斎藤、1996、信田、2015）が虐待の背景にあるとの議論が聞かれて久しいが、これらを踏まえれば、選手から指導者へのキャリア・ラダーが日常的であるスポーツ才能教育において、共依存関係を基盤とした自己の発達の未熟さと虐待的様相の発生が「世代間伝承」（Erikson&Erikson、1997、訳 2001）する可能性が推測される。

さらに小川（2013、2015）によれば、才能教育下にあるアスリートのこころの発達の未熟さが共通にあるとしても、アスリートと指導者および原親の間にある共依存関係には「依存四類型」（図1）と呼ぶいくつかの下位パターン<sup>3</sup>があり、それぞれの中で特有の家族力動が生じている。したがって、虐待的行為の加

---

<sup>1</sup> 会津大学文化研究センター

<sup>2</sup> 岐阜聖徳学園大学教育学部

<sup>3</sup> 各カテゴリの特徴は以下のとおりである。①純粹培養（Cocooned）は、「アスリートがスポーツという無菌室で培養されている」状態で、アスリートにとっての人生の重要な意思決定は、親や指導者が行うか、彼らによって用意される限られた選択肢からなされる。アスリートは選択肢の吟味やそれに伴う葛藤、衝突をほとんど経験していないため、感受性が極端に乏しく、ネガティブな側面を内面の中で処理できずに身体化させる傾向がみられる。選手と親や指導者は、スポーツの世界にいることを幸せだと認識している。幼児期以降の発達課題について、家族を含めた対人関係の中で葛藤を伴わずに積み残している。②支配（Dominated）では、親や疑似親とアスリートが「支配と服従」の関係にあり、スポーツは支配者である親や指導者と遣える者である選手の間で取引される。親や指導者は自立できておらず、選手を遣える（仕える）ものとして扱うことに依存している。一方選手は、幼児期からの甘えたい気持ちが充足しておらず、親や指導者に対して、表面的にはポジティブに取り繕うものの、実際には親たちに対して表現できない怒り、恐怖心、無力感を抱えている。③過干渉（Invaded）は、「親や指導者が選手にとってまじめで手厚く、時に煩わしい養育態度を示している」状態である。選手は、親や指導者の干渉を嫌がって回避すると臆病になり、別の守りを求めるか、都合よく親や疑似親の提案に依存する「回避と依存の悪循環」を続け、結果的に自立が一向に進まない。アスリートにとって、スポーツは親や指導者による干渉を回避するための守りの一つとなる。選手は、不測の事態に対して激しく動揺する傾向にあり、指示やルール以上の場面で臆病で身動きが取れずに身体化させたり、守りを求めたりしようとして問題行動を起こす。幼児期以降の課題を積み残し、家族の枠から離れて「有能感」を得られないでいる。最後に、④構ってもら

害被害が発生するメカニズムの心理学的解明とその支援の方法を検討するために、アスリートと指導者の間にある依存性の特徴と、指導者による虐待的行為との関係性の検討は必要不可欠であると本研究は考える。

以上のことから本研究は、才能教育において、指導者がアスリートに対して行う虐待的行為を、「児童虐待防止等に関する法律」（以下、法律）による虐待の定義（身体的虐待・性的虐待・ネグレクト・心理的虐待）に基づいて抽出し、「依存四類型」（図1）と照合してこれらの関係性を検討する。

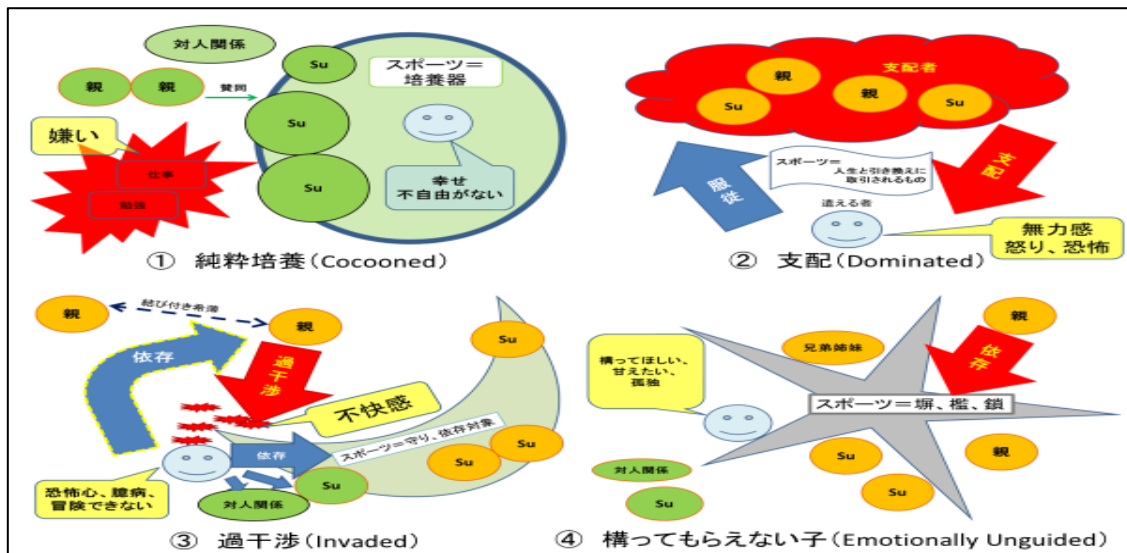


図1 アスリートの家族・家族的関係に対する依存四類型（小川、2013）より加筆修正

## 2. 方法

### (1) 対象

スポーツで起こっている指導者からの厳しい指導について、家族らの依存性を踏まえて虐待と認識している研究は数少ない。そのうち、本研究は Human Rights Watch（2020）の中で述べられている虐待的行為、および著者がこれまでに得てきた調査データを対象にすることとした。具体的には、(1) Human Rights Watch（2020）において虐待的行為に言及している内容、および (2) 「依存四類型」（小川、2013、2015）とその5年後縦断調査のうち、事前承諾を得られている7名を対象に行われた12回の調査データである。また、「依存四類型」（小川、2013）の当初の分析概念図であるKJ法A型（図1）も参考とした。

Human Rights Watch（2020）は、対象となる調査が行われた当時、あらゆるレベルでスポーツをしていた子ども、及び子どもの頃スポーツをしていた人50人以上へのインタビュー調査、25歳未満175人を含むオンラインアンケート調査、スポーツ団体へのデータ提供依頼、通報相談窓口への問合せ等の調査に基づいて作成されている。「子ども」という表記の指す具体的な年齢は示されていないが、暴言や暴力を「虐待」

えない子 (Emotionally Unguided) は、選手が親や指導者と「スポーツという扉によって遮られている」状態にある。言い換えれば、スポーツがなければ、家族的な結びつきを維持できない。親や指導者は、経済的支援や競技指導を介してアスリートとかかわりあっているため、「スポーツそのもの」か「子供がスポーツをしている状態」に依存し、情緒的に子供とかかわるといふ本質的な役割を果たさないでいる。よって、問題行動や身体症状の背景に、乳児期から親にかまってほしいという欲求が青年期になっても満たされず、底知れぬ孤独感がある。



と認識していることを踏まえれば、「児童虐待の防止等に関する法律」で対象とする児童等の定義である 18 歳未満の人をおおむね対象としていると本研究では認識して検討した。

一方「依存四類型」(小川、2013)で対象となったのは、高校もしくは大学にスポーツ推薦で入学した、調査当時 21 歳から 24 歳までの大学スポーツ競技における現役選手か、もしくは現役引退間もないアスリートであった。小川 (2013) の調査で用いたインタビュー項目では、Marcia (1964) の質問項目、成育歴、競技歴、競技戦績、その他親や指導者らからなされた接し方およびコミュニケーションの特徴、SCT 実施後の質問等が含まれている。この中には、幼い頃からインタビュー時までの親や指導者の接し方や言葉がけを回顧的に尋ねている。大学での指導者による言動も対象として含んだのは、スポーツ才能教育でのアスリートの心理的未熟さ、および背後にある家族力動がすぐには変容し難いと考えられるためである。

本研究で対象となったのは、5 年後調査までで行われた調査のうち、研究対象として活用されることへの書面での事前承諾がある 12 回の調査データである。依存四類型の各カテゴリについては、純粹培養：1 名、支配：2 名、過干渉：2 名、構ってもらえない子：2 名であった。ただし、初回調査で「純粹培養」に分類された調査協力者 2 名は、5 年後調査ではいずれも追跡できなかった。

## (2) 分析方法

指導者の虐待的行為の記述を抜き出し、それぞれを法律の定義にある「身体的虐待」・「性的虐待」・「ネグレクト」・「心理的虐待」の内容に基づいて分類した。分析は、対象とする記述を表 1 にある各虐待の具体例に基づいて抽出、分類し、その後「依存四類型」(小川、2013、2015)ごとに件数を確認した。表 1 には依存四類型のカテゴリごとに見られた虐待的行為の件数と種類を記載している。

表 1 分析の際に用いた法律の定義と具体的行為の例

虐待の種類	具体的行為の例
身体的虐待	殴る, 蹴る, 叩く
性的虐待	性的行為をする, あるいは性的行為を見せる
ネグレクト	部屋に閉じ込める, 食事や水を与えない, 指導しない
心理的虐待	言葉やものによる脅し, 他のメンバーへの暴力などを見聞きする, 選手間で差別的な扱いをする

厚生労働省 (2000) 「児童虐待の防止等に関する法律」に基づき、著者が作成

## (3) 倫理的配慮

小川 (2013) 実施時には、研究指導教員の指導を受けて調査を実施した。5 年後縦断調査の実施時には、各研究機関が実施する研究倫理教育等を終了した研究者 3 名による倫理的検討を経て実施した。調査開始前に、研究目的、個人情報保護、調査への協力は任意であり、参加の有無による不利益を被ることがないこと、また、調査協力に同意しても、中断や中止が可能であることについて、書面と口頭で説明が行われた。この後に、書面にて調査協力の同意を得て、調査実施に至った。

## 3. 結果と考察

### (1) Human Rights Watch (2020) における報告における虐待

Human Rights Watch (2020) の中では、主に身体的虐待 (一部、ネグレクトを含む) が取り上げている。こ

これは Human Rights Watch で対象とした調査データの中で身体的虐待に関する報告件数が多かったためである。加えて性的虐待、暴言（心理的虐待）も取り上げられている。インタビュー調査、オンラインアンケート調査ともに十分な協力者に基づいた内容であることが読み取れ、プライバシーの保護がなされたうえで、スポーツ教育の中での虐待の事例をつまびらかにしている報告書として貴重である。しかし、この文献では精神分析的な観点からの議論、すなわち「依存四類型」（小川、2013、2015）と虐待の特徴との関係性についての手がかりを見出して記述することはできなかった。ただし、スポーツ教育の現場で身体的虐待が他の虐待よりも多く報告されることは、指導者が感情表現や指導内容の言語化が苦手で、アスリートへの指導やそれに伴うコミュニケーションが教育現場としてふさわしいかたちで行えていないであろうこと、そしてアスリートなど相手に対するネガティブな気持ちをコントロールするのが困難で、身体的なアプローチに至っている可能性が伺える。

## （2）縦断調査のデータにおける虐待

小川（2013、2015）が対象としたインタビュー調査、およびその5年後縦断調査のデータを分析した。これにより得られた結果について、依存四類型と虐待的行為の件数との関係を表2に示す。ここでは、**心理的虐待**（38件）が最も多く、**身体的虐待**（11件）、**ネグレクト**（3件）、**性的**（0件）が続いた。データの中での虐待的行為の件数に関する結果（表2）、小川らの一連の研究、およびKJ法A型（図1）を踏まえ、各カテゴリにおけるアスリート、指導者、およびそのアスリートがのちに指導者になった場合の臨床像について推測し、記述した。

### ① 「純粋培養」での臨床像

このカテゴリのアスリート像は、言語化や感情表現が総じて苦手であり（小川、2013）、存在がはかなくつかみどころがない（小川・煙山、2022）。他のカテゴリに比べて自己像が希薄で存在感が薄いため、追跡するなどの縦断的な関係性を維持するのが難しいのも特徴である。このカテゴリにおける本研究の調査協力者は、心理的虐待に関する指摘はできていたものの、その件数は他のカテゴリよりも少なかった。これらのことから、アスリートは指導者からいずれの種類の虐待に遭っても、それを虐待とは理解できなかったり、辛さを感じられなかったりするために、被害としての意識や報告が出てきにくい可能性がある。一方、図1に現れている指導者像は、お互いの感情の表現や主張が見られる機会が他のカテゴリに比べると少ない。表2における虐待的行為の件数も他のカテゴリより少ない。このことから、言語化をして思いを伝えるのが苦手か、そもそも感情や考えが希薄であることも考えられる。このカテゴリのアスリートが将来指導者になる場合は、そもそも感情を感じられず、対人関係でその動きが見られづらい特徴が推察される。また、言語化が苦手で、もし何らかの大きな刺激で感情を表出させる場合には、身体的なアプローチや感情とつながりあわないような言語表現が見られる可能性が推察される。

### ② 「支配」での臨床像

「支配」では、親や指導者がアスリートを支配し、アスリートはそれに仕える関係性があり、アスリートにとって生きることとスポーツが引き換えとなる（小川、2013、2015）。よって、このカテゴリのアスリートは、自分の意思や要望を親だけでなく指導者にも聞いてもらえる機会が極めて少ない。また、親に対してと同様、指導者に対しても怒りや恐怖があるが、それに対して関係が調整されることに無力になっており（小川、2013、2015）、親や指導者に一方的に支配されるような状態が続く（図1参照）。言い換えれば、親や指導者らの支配的な関わりあいにより無力にさせられているという関係性そのものが、心理的虐待とも捉えられる。図1に現れている指導者像は、アスリートにスポーツをすることを要求するものである。アスリートが従えない（従わない）場合に、怒りや欲求不満などの感情が身体的あるいは**心理的虐待**とし

て現れる場合が推察される。

このカテゴリのアスリートへの具体的な心理支援として、小川（2021）は、その感情を聞くことを通じて時間はかかるが自己形成が進み、5年後には堅固な支配関係は緩む事例を示している。アスリートが怒りや恐怖などの感情を垣間見させるほどに言語化ができる点で、純粹培養よりも心理的発達が進んでいると推察できる。たとえば、アスリートは当初、親や指導者の支配に対して身動きができないで従っていた（図1）が、5年後には親に対して次第に自己主張ができるようになり、指導者に対しても危険な状況を察知して距離をとるなどの行動ができるようになる（小川、2021）。このような5年の縦断調査に基づく変容に基づけば、このカテゴリのアスリートが心理的介入を経て将来指導者になる場合については相手の感情を理解でき、適度にアスリートとの緊張状態について距離を取れるようになるのであれば、虐待に及ぶ緊張状態を回避できる可能性がある。しかし、スポーツ才能教育で心理的発達を促すような介入が一般的ではないこと、また支配構造からの離脱は困難で、ロールモデルのほとんどが虐待的な親や指導者であること（図1）を考慮すれば、自身が指導者になって後進のアスリートに虐待的に接してしまう可能性が推察される。

### ③ 「過干渉」での臨床像

「過干渉」のアスリートは、指導者による**身体的、心理的虐待**に遭遇する場合があった。とくに心理的虐待は他のカテゴリに比べて多くの件数がみられる。先の支配型のアスリートが「支配と服従」の関係の下で無気力であり、指導者に対して反抗や主張を行うことが少ないのに対し、過干渉型の場合は、親からの干渉から「逃げる」という対処行動のパターンのようなものを有しており、じっとしているということは珍しい。スポーツは親からの逃げ場であるが、そこは過酷な競争および指導者の虐待的行為に遭遇して平穏ではないとわかると、支配型のアスリートのように無気力になるのではなく、回避や問題行動等を起こすエネルギーとパワーがある。この特徴は過酷な状況で消耗しても戦い続けるという意味で、トップ・アスリートに向いているともいえる。また、純粹培養よりも言語化が得意な様子が垣間見られる。

小川（2013, 2015）における指導者像は、アスリートにとって守りであるはずのスポーツの中で、暴言に加え、他のアスリートと比べての差別的扱いがある。表2では、他のカテゴリにおける指導者よりも、アスリートにそれが認識され、語られている件数が多い。このことから、普段の指導行為の中で、暴力は伴わないにしても、アスリートに向けて言語や態度で差別的なものが頻出している可能性が大きい。過干渉型のアスリートが逆境に直面して、問題行動や回避行動を起こしたり、言語化がしやすいなどの特徴は、指導者からは目立った特徴として捉えられ、依存を背景にして虐待的行為の標的になりやすいと考えられる。

過干渉型のアスリートが引退して指導者となった場合、後進のアスリートにとってスポーツ（ルール）という守りの中で過干渉的にかかわることが考えられ、言語が他よりも達者でルールを重要視し、細かいことをしばしば指摘する可能性がある。場合によっては、必要以上に理不尽に指摘するかもしれない。過干渉型では幼いころからの「有能感」（Erikson, 1959、訳 2011）の獲得に課題を積み残し（小川、2013、2015）、心理的に追い込まれると、アスリートの場合は回避して別の守りを見つける行動に出ることができる。しかし、指導者の場合は、アスリートと対峙する際に別の守りを見つけて逃げることは困難である。その結果、指導者が自分を守るためにアスリートを必要以上に説教するなどの過度な攻撃をすることが予想される<sup>4</sup>。**心理的虐待**の件数が他のカテゴリよりも多いのはこのような心理的メカニズムによると考えら

<sup>4</sup> たとえば、指導者が自分の優位性を保つために、優秀なアスリートを理不尽な状況で引き下げるように暴言を吐く行動が一例である。

れる。指導の上で言語化が比較的得意で、ルールなどの型にはまった説明ができる一方で、新しいことの創造や例外的なことの発生に脆弱で、狼狽する（小川、2013, 2015、Ogawa、Forthcoming）などの特徴が考えられる。小川（2013）では、過干渉型のアスリートの問題行動が示されている。たとえば「アスリートが病気になる」（Ogawa、Forthcoming）、「大けがを繰り返す」（Ogawa, 2017）がその例である。このような現象は、虐待様の被害からアスリート自身が自分を守る行為ともいえるだろう。言い換えれば、指導者の病理がアスリート側にもさらなる病理を発生させている。このような病理の二重構造においては、その両方の立場に心理支援が必要であると考えられる。

#### ④ 「構ってもらえない子」での臨床像

「構ってもらえない子」では、スポーツ、そしてそれに伴う財力が家族や指導者とアスリートを結びつける塀のようなものとして存在しており（小川、2013, 2015）、このカテゴリのアスリートは、乳児期からの親らに構ってほしいという欲求が一向に満たされず、底知れぬ孤独感がある。図1に現れている指導者はアスリートと情緒的にかかわるといふ疑似親的な役割を果たせないでいる（小川、2013, 2015）。このような関係性においては**ネグレクト**が見られる可能性があるが、本研究の調査でも本研究の結果では他のカテゴリに比べてネグレクトの件数が最も多い（表2）。一方で、身体的虐待に肯定的な捉え方が見られた（表2）。アスリートは底知れぬ孤独感があり、指導者による**身体的虐待**に遭遇する場合に、自分のために行われる行為であると肯定的に受け止めてしまう側面が伺える。また、他の選手と比べて構ってもらえていない、つまり、他にえこひいきを感じると、**心理的虐待**にも敏感に反応するかもしれない。

このカテゴリのアスリートが指導者になる場合、親や指導者から情緒的にかかわってもらった経験が希薄で、底知れぬ孤独感がある。よって、アスリートに愛情をもって接するとはどのようなことかがわからず、物理的には近くで接する場合でも、心理的紐帯を持つことは簡単ではないと推測される。指導者へ立場が変わっても、ネグレクトのような状態が見られるかもしれない。

表3は、カテゴリごとの臨床像を要約したものである。

表2 小川（2013, 2015）と5年後縦断調査における虐待の種類ごとの件数

類型(人数)	身体的	性的	ネグレクト	心理的
① 純粹培養 (1:初回)	0	0	0	3
② 支配 (2:初回、および5年後)	5	0	1	10
③ 過干渉 (2:初回、および5年後)	2	0	1	21
④ 構ってもらえない子 (2:初回、1:5年後)	5 (肯定含む)	0	5	13
計	12	0	7	47

表3 依存四類型と虐待の種類

類型	虐待の種類と特徴
純粋培養	起こっていることを虐待と感じられない、それについての感情を感じられない、言語化できない、実態をつかみにくい
支配	身体的虐待・心理的虐待が見られる傾向がある、支配に対して怒りや恐怖を感じる、アスリートが無力化して、関係に動きが見られづらいが、虐待的行為は言語化される傾向がある
過干渉	虐待に対してアスリートの活発な回避行動が起こる。さらにそれに虐待的行為が起こりやすい。身体的虐待・心理的虐待が起こりやすく、とくに心理的虐待の件数が顕著である。虐待が言語化されやすい。
構ってもらえない子	情緒的紐帯が希薄でネグレクト状態が見られる。身体的虐待が起こっても、関わられることについて肯定的に受け止めてしまうことがある。

#### 4. まとめ

本研究の結果から、スポーツ才能教育の指導者からアスリートの指導において、身体的、性的虐待が多く報告されている（Human Rights Watch、2020）だけでなく、小川（2013）に端を発する才能教育下のアスリートへの調査データから心理的虐待が相当数あり、ネグレクトとしてとらえられるものも起こりうるということがわかる。さらに、依存四類型の各カテゴリ別に想定できる指導者の臨床像においても、起こりうる虐待の種類に特徴がある。スポーツ才能教育に特有の心理的発達の未熟さを背景とした言語化の困難さ、感情表現の乏しさにより、虐待的行為が起こっていてもそれを虐待被害と感じられず、報告に至らない場合も推察された。

心理的発達は、生涯発達の人生を8段階に分けてそれぞれに課題があるとしている（Erikson、1959、訳2011）。また、小川（2013、2015）では幼い段階での課題に十分に対峙できなかったことによる取りこぼしがあり、それが青年期になって問題行動の背後に見え隠れすることを指摘している。このようにみれば、課題の検討や達成にはある一定の時間が必要で、特定の段階の課題の検討にも時間がかかると考えられる。大学での競技生活を終えたアスリートが後に指導者となって、以前の段階で取りこぼした発達課題の検討と達成が飛躍的に起こり、人格形成が短期間でなされる可能性は考えづらい。したがって、指導者は現役時代から依存性のどの類型に当てはまるかを知り、指導者になってからも選手との関係性を考慮しながら自身の対人関係ベクトルの特徴を理解しておくのも、指導者適性を検討するうえで重要であろう。また、指導者候補者の依存四類型の特徴は、組織マネジメントの視座において、人事担当者に採用・配置・現役アスリート育成の戦略のために有益な情報を提供できると考えられる。

#### 5. 参考文献

1. Erikson, E.H. (1959). *Identity and the Life Cycle*, New York: International University Press. (エリクソン、E.H. 西平直・中島由恵 (訳、2011), 『アイデンティティとライフサイクル』、誠信書房: 東京)
2. Erikson, E.H. & Erikson, J.M. (1997). *The life cycle, completed*. New York: W.W. Newton. (エリクソン、E.H. & エリクソン、J.M.、村瀬孝雄・近藤邦夫訳 (2001), 『ライフサイクル、その完結』みすず書房.)

3. Human Rights Watch (2020). 「数えきれないほど叩かれて 日本のスポーツにおける子どもの虐待」、<https://www.hrw.org/ja/report/2020/07/> (2023年2月5日)。
4. 厚生労働省 (2000). 「児童虐待の防止等に関する法律」、<https://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/dv22/01.html> (2023年1月13日)。
5. Marcia, J. E. (1964). *Determination and Construct Validity of Ego Identity Status*, Unpublished Doctoral Dissertation, The Ohio State University, USA.
6. 信田さよ子 (2015). 『加害者は変わるか？DVと虐待をみつめながら』ちくま文庫。
7. 小川千里 (2013). 「競技引退期にある日本人スポーツ選手の心理的問題と臨床的支援」、放送大学大学院文化科学研究科臨床心理学プログラム修士論文、全42頁 (閲覧不可)。
8. 小川千里 (2015). 「競技引退期にある日本人スポーツ選手の心理的発達と支援—家族的関係から見た4つの類型—」、『Open Forum』、Vol.11、82-83頁、2015年。
9. OGAWA, O.C. (2017). ‘Academic and Psychological Support for a Student Athlete with Severe Injuries—A Case Study from a Major University—’, The 39<sup>th</sup> International School Psychology Association Conference, July 19-22, Manchester, UK.
10. 小川千里 (2019). 「スポーツ選手の心理的発達と臨床的支援 (2) —親・指導者らとの二重関係で悩む競技者の語りから—」、第38回日本心理臨床学会、2019年6月6-9日、パシフィコ横浜。
11. 小川千里 (2021). 「才能教育下のアスリートの5年後調査の結果」、自主シンポジウム56『才能教育下にあるアスリートの心理的依存と自立に関する臨床的支援 (1)』、第40回日本心理臨床学会、2021年9月5日、オンライン大会。
12. OGAWA, O.C. (Forthcoming). ‘Characteristics of Coaches’ Behaviour Towards a Japanese University Athlete Displaying Psychosomatic Movement Disorders: A Longitudinal Case Study in Elite Sports Education’, Graciu, N. (Ed), *Reflection on Higher Education: Challenges and Achievements*, Proud Pen: London.
13. 小川千里・煙山千尋 (2023). 「スポーツ才能教育における虐待の様相とアスリートの依存四類型—指導者適性の理解に向けて—」、第42回日本心理臨床学会、2023年9月1-3日、9月22-10月12日、パシフィコ横浜。
14. 斎藤学 (1996). 『アダルト・チルドレンと家族 心のなかの子どもを癒す』学陽書房。

## 謝辞

本研究は調査協力者による長年の協力により実現している。こころより感謝の意を表す。本研究の中での誤りは、すべて著者の責めに帰するものである。

## 追記

本研究は、小川千里・煙山千尋 (2023). 「スポーツ才能教育における虐待の様相とアスリートの依存四類型—指導者適性の理解に向けて—」 (第42回日本心理臨床学会、2023年9月1-3日、9月22-10月12日) の研究発表の内容に、調査協力者の承諾が得られていた未収録データ2回を追加し、さらなる検討を加えて再構成したものである。

# 研究・教育・社会活動報告





網谷 祐一 (2022年4月～2024年3月)

## 1. 研究活動

著書

- 2022年6月 *Species Problems and Beyond*, edited by John Wilkins, Frank Zachos, and Igor Pavlinov, CRC Press (Contributed a chapter "Is Species Problem That Important?," pp. 39-64). ISBN: 103222147X

研究論文

- 2023年7月 "Finding Value-Ladenness in Evolutionary Psychology: Examining Nelson's Arguments," *History and Philosophy of the Life Sciences*, 45: 36. DOI: 10.1007/s40656-023-00590-7 [査読あり]
- 2022年9月 "Do New Evolutionary Studies of Consciousness Face Similar Methodological Problems As Evolutionary Studies of Mind?" *Annals of the Japan Association for Philosophy of Science*, 31, pp. 31-53. [査読あり]

研究発表 (主なもの)

- 2023年11月 "When Interest-based Explanations Succeed," *Philosophy of Science Around the World*, Online
- 2023年6月 「社会的要因からの説明の諸相」、科学基礎論学会、東海大学、平塚。
- 2022年8月 「行動進化論はメタファーで夢を見るか」、生物学基礎論研究会、オンライン。
- 2022年6月 「科学に社会的・文化的バイアスを見つけること」、科学基礎論学会、オンライン。 [審査あり]
- 2022年5月 "Finding Value-Ladenness in Science: The Case of Evolutionary Psychology," Tokyo Forum for Analytic Philosophy, University of Tokyo, Tokyo, Japan. [招待講演]

競争的資金獲得

- 科学研究費補助金 基盤研究(C) 「アップデートされた「心の進化研究」の方法論的検討」(課題番号: 21K00036)、2021年4月-2024年3月、総額130万円(研究代表者)。

## 2. 教育活動

会津大学における担当授業 (2023年度)

- アカデミックスキル1・2
- 哲学(日・英)
- 科学史
- 課外プロジェクト(「AI・ロボットと倫理」)

## 3. 社会活動

一般向け講演

- 2022年9月 「論文指導I」、みらいづ探究ラボ、會津稽古堂。
- 2022年7月 「研究とはなにか、どういう意味があるか」、みらいづ探究ラボ、會津稽古堂。

学外委員

- 日本科学哲学会(理事[理事会担当理事]、学会誌編集委員)、科学基礎論学会(評議員、企画広報委員[2023年3月まで])、『科学哲学科学史研究』誌(編集委員)

池本 淳一 (2022年4月～2024年3月)

## 1. 研究

著作等出版物 なし

共同研究

- ・2022.5～2024.3 「空き家対策の推進」(喜多方市・都市整備課との共同研究)

その他

- ・池本淳一、2023、「生涯スポーツの「入り口」としての学生武術」、日本武術太極拳連盟『武術太極拳』、No.402、2023年8月、pp.18-19.

制作物・企画・イベントなど

- ・池本淳一、2022.7.2、「東北サファリパーク どうぶつ大接近!!」ほか計5作品(二本松をテーマにしたVR作品)、第52回福島ブロック大会 in 二本松 地域益増進発展事業『Experience Technology～福島の未来のために～』(2022年7月2日開催) 出展、公益社団法人日本青年会議所東北地区福島ブロック協議会・福島の未来創造委員会様より奨学寄附金を授与。
- ・池本淳一、2023.3.18-27、「デジタル未来のモノづくり～3Dモデルをつくろう!～」 「浮き出る物体! 疑似ホログラム体験」、デジタル未来アート展(2023.3.18-27、会津若松市・稽古堂)、株式会社ルート49様(デジタル未来アート事業実行委員会からの事業受託者)より奨学寄附金を授与。
- ・池本淳一、2023.11.12、「大塚山古墳」(MDF製組み立て模型)、(2023.11.12、福島県立博物館・考古学講座「会津大塚山古墳をつくろう」にて使用)。
- ・池本淳一、2023.3.16-24、「デジタル未来のモノづくり2～3Dモデリング～」 「デジタル未来のモノづくり2～電子工作のふしぎ発見～」 「疑似ホログラム2」 「ゲームで遊んで郷土を知ろう!」、デジタル未来アート展(2023.3.16-24、会津若松市・稽古堂)、株式会社ルート49様(デジタル未来アート事業実行委員会からの事業受託者)より奨学寄附金を授与。

## 2. 教育・運営・FD活動

担当授業 アカデミックスキル1・2 社会学 地域社会学 Sociology (集中講義)

2020～2022年度前・後期 課外プロジェクト「社会調査とICTによる地域サポートプロジェクト」

2023年度前・後期 課外プロジェクト「地域イベントと観光サポートプロジェクト」

2020年度前期 課外プロジェクト「人生100年時代」に向けた健康的なカラダづくり

サークル顧問 カンフーサークル

## 3. 社会貢献など

外部委員 ・2019.4～2023.3 会津美里町教育委員会点検及び評価における有識者会議委員

・2020.10～2024.3 会津喜多方商工会議所 事業推進アドバイザー

・2022.2.19～2023.2.19 喜多方市立小中学校適正規模適正配置審議会委員

・2023.6.18～2025.6.17 喜多方市立小中学校適正規模適正配置審議会委員

・2023.6.16～2025 (終了時まで) 公益財団法人会津若松文化振興財団 理事

学会関係 ・2019.6.1～2022.5 日中社会学会 大会担当理事

・2019.9～2022.5 関西社会学会編集委員会専門委員

蛭名 正司 (2022年4月～2024年3月)

## 1. 研究活動 (著作・出版, 学会発表など)

### 【論文】

- ・蛭名正司 割合の非加法性の理解を促進する教授法の検討—ICT を活用した割合の数対生成・参照活動に注目して— 会津大学文化研究センター研究年報, 29, 77-90. (2023.3)
- ・蛭名正司・沖和砂 2022年度会津大学新入生の生活と意識に関する調査 会津大学文化研究センター研究年報, 29, 5-25. (2023.3)
- ・沖和砂・蛭名正司 2022年度会津大学生の生活と意識に関する調査 会津大学文化研究センター研究年報, 29, 27-75. (2023.3)

### 【学会発表】

- ・蛭名正司 割合の問題解決に及ぼす直観的推論の影響 日本教授学習心理学会第19回年会予稿集(2023.6)
- ・蛭名正司 割合の非加法性に関する理解調査—中学1年生を対象として— 日本教授学習心理学会第18回年会予稿集 (2022.6)

### 【研究助成等】

- ・福島県学術教育振興財団助成対象事業“高大連携による AOJ を用いたプログラミング学習環境の構築” 研究分担者 (代表: 渡部有隆) (2023.4-2024.3)
- ・会津大学競争的研究費“Learning support project using “Tsumazuki Share Board” 研究代表者 (2022.4-2023.3)

## 2. 教育活動

教育心理学, 教育方法, 教育課程論, 数学科教育法1, 数学科教育法4, 情報機器の活用に関する理論と方法, 教職実践演習, 教育実習1, 教育実習2, 教育実習事前事後指導, アカデミックスキル1, アカデミックスキル2, 卒業研究, 課外プロジェクト「教師になろう！」

## 3. 学内運営 (委員会など)

学生支援委員会 (2022年4月—)

## 4. 社会活動

### 【委員等】

- ・会津若松市教育委員会点検及び評価における有識者会議委員(2018-)
- ・会津若松市通学区域検討委員会委員(2022.5)
- ・会津若松市立一箕中学校学校運営協議会委員(2020-)

### 【その他】

日本教授学習心理学会編集委員会事務局 (2019-) 理事 (2023-)

小川 千里 (2022年4月～2024年3月)

## 1. 研究 (主要なもの)

(招待講演)

・ OGAWA, O.C., (2022). 'Lifelong Education for Professionals in Japan- Case Studies on Elite Athletes and School Teachers', The Teaching and Education Summit (TESUMMIT), Learning and Education, November 9-11, Proud Pen & Acavent (Online).

・ OGAWA, O.C., (2022). 'A Solution-focused Team Meeting Method with Business Facilitation: from Japanese Educational Settings', the 5<sup>th</sup> Edition of the International Academic Conference on Teaching, Learning and Education, October 21-23, Athens, Greece (Online).

(書籍)

・ OGAWA, O.C. (Forthcoming). 'Characteristics of Coaches' Behaviour Towards a Japanese University Athlete Displaying Psychosomatic Movement Disorders: A Longitudinal Case Study in Elite Sports Education', Graciu, N. (Ed), *Reflection on Higher Education: Challenges and Achievements*, Proud Pen: London.

(学術論文)

・ OGAWA, O.C. & YAMADA, M., (2023). 'Impact of Facilitation Skills Training for School Administrators in Japan: Using the Solution-Focused Team Meeting Method in Educational Counseling Collaborations', Paper presented at the 16th Annual International Conference of Education, Research and Innovation, November 13-15, Sevilla, Spain, pp.40-47.

(学会発表)

・ OGAWA, O.C. & UCHINO, H. (2023). 'Impacts on Collaborations in Educational Counseling by Utilizing the Solution-Focused Team Meeting Method: A Case Study from the Managerial Perspective', Poster presented at the 44th Annual Conference of the International School Psychology Association, July 5-8, 2023, Bologna, Italy.

・ 小川千里・煙山千尋 (2023) .「スポーツ才能教育における虐待の様相とアスリートの依存四類型—指導者適性の理解に向けて—」, 第42回日本心理臨床学会, 2023年9月1-3日, 9月22-10月12日。

・ 小川千里・丹藤美津子・内野博之・笠井敬祐・木嶋葉子・山田まり子・荻間澤勇人 (2023) .「公認心理師時代の教育カウンセリング—公認心理師の資格を持つ教育カウンセラーの役割—」, 第20回日本教育カウンセリング学会自主シンポジウム, 2023年10月28-29日。

(競争的資金の獲得)

・ 2021-2024年度 科研費 (基盤C) 「スポーツ虐待防止のための指導者の依存性への介入の方略」 (代表) (受賞) サイエンティスト・プラクティショナー賞, 日本教育カウンセリング学会, 2022年7月10日。

## 2. 教育

(担当授業) ビジネス・コミュニケーション (2023) 経営戦略論 (2023), ベンチャービジネス論 (2023) キャリア教育 (2023), 心理学 (2022), アカデミックスキル1 (2023), 2 (2022-2023)

## 3. 社会貢献 (主要なもの)

(外部委員等) Reviewer of Journal of Counseling Psychology, Reviewer of the 33<sup>rd</sup> International Congress of Psychology, A member of the Conference Committees of the National Career Development Association 2023, 日本教育カウンセリング学会査読委員, 会津美里町教育委員会点検及び評価における有識者会議委員, (研修等) 会津大学公開講座 (アイズ・キャリア、福島医療専門学校)、福島県中小企業家同友会会津支部, 日本ブラジル鍼灸協会、大間町役場 (実務経験) オリビア心理カウンセリング研究所代表、IKEA Kobe Store Logistics

沖 和砂 (2022年4月～2024年3月)

## 1. 研究 ※代表的な研究のみ記載

(学会発表)

- ・ 沖和砂. コロナ禍における体育実技の意義の検討, 日本体育・スポーツ・健康学会第72回大会, 体育心理, 2023.9.1 (ポスター発表).
- ・ 沖和砂. 高校部活動実施者の体組成測定による発育発達状況の把握一部活動間での比較, 日本体育・スポーツ・健康学会第73回大会, 発育発達, 2023.9.1 (ポスター発表).

(学術論文)

- ・ 蛭名正司・沖和砂. 2022年度会津大学新入生の生活と意識に関する調査, 会津大学文化研究センター研究年報 (29), 5-25, 2022. (2023.3 発行)
- ・ 沖和砂・蛭名正司. 2022年度会津大学生の生活と意識に関する調査, 会津大学文化研究センター研究年報 (29), 27-74, 2022. (2023.3 発行)

(書籍)

- ・ 水野基樹 監修・編著, 「リーダーシップ理論の新機軸—スポーツ組織への展開—」  
コラムを3編担当, (現在印刷中).

(競争的研究費)

- ・ The 2022 University of Aizu Competitive Research Funding “An Exploratory Study of Risk Factors Inducing Sports Injury in Disabled Alpine Skiers” (研究代表者)
- ・ The 2023 University of Aizu Competitive Research Funding “Development of Basic Guidelines for Safe Lift Access for Disabled Skiers” (研究代表者)

## 2. 教育・運営・FD活動

(担当授業)

- ・ 健康・スポーツ科学実習1 (3クラス)、2 (3クラス)
- ・ 生涯スポーツ科学実習 (スキー) ・ 保健学
- ・ 卒業研究 アカデミックスキル1、2 ・ SCCP (A unique sport in Aizu)

(学内委員会)

- ・ ハラスメント防止/対策委員会 (ハラスメント相談員) ・ 衛生委員会
- ・ カフェリモデルプロジェクト ・ 学生支援WG ・ 創立30周年プロジェクトチーム
- ・ 教職員のための運動プログラム講師

## 3. 社会貢献

(外部委員)

- ・ 福島県スキー連盟 (総務本部長/副理事長)、国民体育大会福島県選手団女性コーチ
- ・ 福島県スポーツ指導者協議会 (理事・講師) ・ (公財) 福島県スポーツ協会 各事業 (講師)
- ・ 勿来工業高等学校ラグビー部メンタルサポーター  
※勿来工業高等学校は2022年度7人制、15人制ラグビー全国大会出場
- ・ 人類働態学会 (事務局長・理事)
- ・ 日本体育・スポーツ・健康学会 (応用研究部会・スポーツ文化研究部会員) 体育心理分野より選出 (講演活動)

※県内外各所において講演活動を実施

苅間澤 勇人 (2022年4月～2024年3月)

## 1 研究活動 (著作・出版, 論文, 学会発表)

- ・苅間澤勇人(2023). 課題集中高校でグループアプローチを教育に生かす 日本教育評価研究会編 指導と評価 第69巻4月号(通巻821号), pp. 35-38, (一社)日本図書文化協会
- ・苅間澤勇人(2023). 「Q-U」の活用から広がる教育実践と信頼関係 日本教育評価研究会編 指導と評価 第69巻10月号(通巻827号), pp. 32-35, (一社)日本図書文化協会
- ・苅間澤勇人(2024). 教師こそ, ワーク・ライフ・インテグレーションを目指そう 日本教育評価研究会編 指導と評価 第70巻2月号(通巻830号), pp. 31-33, (一社)日本図書文化協会
- ・苅間澤勇人・小林朋子・川俣智路・磯村元信・神崎真実・藤江玲子(2023). 新型コロナ禍において困難を抱える高校生への心理教育的援助の現状と課題—支援が限られる高校や課題集中高校に注目して— 教育心理学年報, 62, pp. 271-279
- ・小川千里・丹藤美津子・内野博之・木嶋葉子・山田まり子・苅間澤勇人 (2023). 公認心理師時代の教育カウンセリング—公認心理師の資格を持つ教育カウンセラーの役割— 2023年日本教育カウンセリング学会第20回研究発表大会発表論文集, pp. 22-27

## 2 教育活動

- ・教育入門    ・教師入門    ・生徒指導・教育相談    ・情報と職業    ・教育実習事前事後指導
- ・教育実1・2    ・情報機器の活用に関する理論と方法    ・教職実践演習    ・アカデミックスキル1・2

## 3 社会活動

### (1) 会津大学公開講座

#### ○教員派遣公開講座

- ・福島県教育センター    ・喜多方市立教育委員会
- ・棚倉町教育委員会    ・会津坂下町教育委員会
- ・矢祭町立矢祭小学校    ・矢祭町立矢祭中学校
- ・白河市教育委員会    ・白河市立釜子小学校
- ・会津美里町立高田小学校

### (2) 研究成果の還元 (研修会)

- ・岩手県 一戸町教育委員会    ・岩手県 洋野町教育委員会
- ・山形県教育センター    ・山形市教育委員会
- ・盛岡市立城東中学校    ・一関市立桜町中学校

### (3) 委員等

- ・会津若松市教育委員会 学力向上委員会 (委員長) (2016年度から)
- ・白河市いじめ対策連携協力会議 (委員) (2018年度から)
- ・その他

### (4) 学会活動

- ・日本教育心理学会 社員    ・日本教育カウンセリング学会 常任理事
- ・日本教材学会 常任理事    ・日本学級経営心理学会 常任理事
- ・日本特別活動学会 理事

小暮 克夫 (2022年4月～2024年3月)

## 1. 研究

(学術論文)

- Kogure, Katsuo and Satoru Shimokawa, "Civil War and Insect Food Culture in Cambodia," unpublished manuscript, University of Aizu, March 2024. (査読無)
- Kogure, Katsuo and Yoshito Takasaki, "COVID-19 and Crime in Space and Time: A Multi-Scalar Causal Analysis in Sao Paulo State, Brazil," unpublished manuscript, University of Aizu, March 2024. (査読無)
- Kogure, Katsuo and Kiyoyasu Tanaka, "Long-Term Impacts of Extreme Deprivation in Infancy, Childhood, and Adolescence," unpublished manuscript, University of Aizu, December 2023. (査読無)
- Kogure, Katsuo and Masahiro Kubo, "Cambodian Refugees," HIAS Discussion Paper E-125, Hitotsubashi University, November 2022. (査読無)

(講演・口頭発表等)

- Kogure, Katsuo "Long-Term Impacts of Extreme Deprivation in Infancy, Childhood, and Adolescence," Australian Meeting of the Econometric Society, University of New South Wales, Sydney, Australia, August 9, 2023. (査読有)
- Kogure, Katsuo "Long-Term Impacts of Extreme Deprivation in Infancy, Childhood, and Adolescence," Asian Meeting of the Econometric Society, Nanyang Technological University, Singapore, July 28, 2023. (査読有)
- Kogure, Katsuo "Long-Term Impacts of Extreme Deprivation in Infancy, Childhood, and Adolescence," Hitotsubashi Summer Institute (HSI) 2023, Hitotsubashi University, June 10, 2023. (査読無)
- Kogure, Katsuo "Long-Term Impacts of Extreme Deprivation in Early Childhood and Adolescence," Workshop on Empirical Moral Science, Shikoku University, March 6, 2023. (査読無)

(競争的研究費)

- 2023-26年度 科研費(基盤研究(B)). 「カンボジアにおける昆虫養殖を活用した貧困削減と未来型食品生産の両立の可能性」(研究分担者)
- 2020-24年度 科研費(基盤研究(C)). 「紛争と経済発展に関する実証研究」(研究代表者)
- 2018-23年度 科研費(挑戦的研究(開拓)). 「空間データと開発プログラム評価の統合」(研究分担者)
- 2018-23年度 科研費(国際共同研究強化(B)). 「熱帯雨林の保全と開発に関する学際共同研究」(研究分担者)

## 2. 教育・運営

(担当授業) 経済学(日本語), 経済学(英語), 経済発展論, アカデミックスキル1・2

(学内委員会) 教育の内部質保証ワーキンググループ

## 3. 社会貢献

(外部委員)

- 一橋大学経済研究所(非常勤研究員)(2021-23年度), 国際協力機構(JICA)(アドバイザー)(2022-23年度), 会津若松地方広域市町村圏整備組合情報公開等審査会委員(委員)(2020-23年度)

中澤 謙 (2022年4月～2024年3月)

## 1. 研究

(競争的研究費)

- ・ 2021-2023年度 科学研究費(基盤研究C) 保育者としての成長過程に沿ったVR-Learning教材の開発(研究代表者)
- ・ 2023-2025年度 科学研究費(基盤研究C) 体育教師の自覚的な課題解決方略を高めるシステムの開発(研究分担者)

(研究発表)

- ・ 中澤 謙, 久田 泰広, 渡部 琢哉, 西原 康行 (2023.3) VRを用いて代替可能な保育観察力形成要素の検討. 日本教育工学会 春季全国大会, 59-60 (口頭)
- ・ 中澤 謙, 久田 泰広, 渡部 琢哉, 西原 康行 (2023.9) VRによる保育観察時の視線の特徴. 日本教育工学会 秋季全国大会, (ポスター)
- ・ 渡邊 千春, 西原 康行, 中澤 謙 (2023.9) 日本における医療電話相談の現状と課題. 日本教育工学会 秋季全国大会, (ポスター)

(学会運営)

- ・ 日本教育工学会 2023年 春季全国大会(第42回大会) 一般研究発表1 教師教育(1) 座長
- ・ 日本教育工学会 2023年 研究会(オンライン) 一般研究発表1 午後の部1 B会場 座長

(研究報告書)

- ・ 中澤 謙, 久田 泰広, 渡部 琢也, 西原 康行 (2023) 同時多発的に子どもが入れ替わる状況下における学生と教師の視線方略. 日本教育工学会研究報告集 2023(3) 107-112

## 2. 教育・学内運営

(教育)

「健康スポーツ科学科目」健康・スポーツ科学実習1(C2, C3, C5),  
健康・スポーツ科学実習2(C1, C3, C5), 生涯スポーツ科学実習(水泳)

「人文社会科学科目」 アカデミックスキル1、アカデミックスキル2, 保健学

「卒業論文」

「課外プロジェクト」 Human Body Motion Analysis Project

(学内運営)

- ・ 情報センター運営委員会/情報センター運用管理業務委託ワーキンググループ /カリキュラムワーキンググループ, 他.

## 3. 社会貢献

(学外委員会等)

- ・ 福島県スポーツ振興基金(理事) / (公財)日本水泳連盟学生委員(北部支部長), 東北地区大学体育連盟(評議員) / 福島県スポーツ医・科学委員会(委員) / 会津若松市公園緑地協会運営委員会(委員)

(大会運営)

- ・ 東北地区大学選手権水泳競技大会 (鯉ヶ沢町スポーツセンター室内温水プール・主催)
- ・ 第70回全国国公立大学選手権水泳競技大会 (ダイエープロビスフェニックスプール・上訴審判)
- ・ 第99回全日本学生選手権水泳競技大会 (東京アクアティクスセンター・上訴審判)



## 執筆者一覧（五十音順）

網谷 祐一	(A)	会津大学上級准教授（哲学・科学史）
池本 淳一	(A)	会津大学上級准教授（社会学）
蛭名 正司	(A)	会津大学上級准教授（教育心理学）
小川 千里	(P)(A)	会津大学上級准教授（経営学）
沖 和砂	(A)	会津大学准教授（スポーツ健康科学）
荻間澤 勇人	(PF)(A)	会津大学教授（教育学）
煙山 千尋	(P)	岐阜聖徳学園大学准教授（スポーツ心理学）
小暮 克夫	(A)	会津大学上級准教授（経済学）
中澤 謙	(A)	会津大学教授（保健学）

※ (PF)巻頭言 (P)論文 (A)活動報告

会津大学文化研究センター研究年報 第30号 2023

2024年 3月 31日 発行

発行 会津大学

郵便番号 965-8580

福島県会津若松市一箕町鶴賀

Fax 0242(37)2751

編集 会津大学文化研究センター

